

戦後を あゆむ

横浜市民ギャラリーコレクション展2026

YCAC Collection Exhibition 2026
The Postwar Path

横浜市民ギャラリー | Yokohama Civic Art Gallery

ごあいさつ

2025年、日本は戦後80年を迎えました。横浜市民ギャラリーは1964年に開館し、60年を超える活動のなかで絵画や写真等、約1,300点のコレクションを形成してきました。本展ではそれら所蔵作品の中から、1930～1940年代の戦争の影響や戦時下の様子、戦後の社会について読み解くことができる絵画、写真、一コマ漫画など約60点の作品をご紹介します。当館が戦後をテーマに所蔵作品を展覧するのは、1995年の「戦後の記憶」展以来、30年ぶりのことです。

さらに所蔵作家に関連する資料として、漫画家が終戦日の記憶や戦後の横浜の日常を描いた作品、小説家の手稿などを加えることにより、作家たちが戦争、社会、人々の営みをどのようにみつめ、表現してきたのかを深く掘り下げます。

これらの作品を通して、戦後の日本を生きた人々の歩みをたどり、横浜の移り変わりを感じることができるでしょう。

現在も世界では争いが絶えず起こり、社会は混迷を深めています。日本で起きた戦争も決して遠い過去の出来事ではありません。私たちは今なお、戦後という歴史から地続きの現代を生きています。このような時代にこそ、本展が私たち一人ひとりの平和への思いを深める機会となることを願っています。

最後になりましたが、本展のためにご協力くださいました関係者ならびに関係機関の皆様、心より御礼申し上げます。

2026年2月
横浜市民ギャラリー

プロローグ

Prologue

画面全体が暗い色調を帯びた《ブランコと少年》。少年の体には真っ黒な影が落ちています。横浜に生まれ、幼少期に両親を亡くした緑川廣太郎の孤独が反映されているのでしょうか。本作が描かれた1937年、日本は日中戦争に突入します。

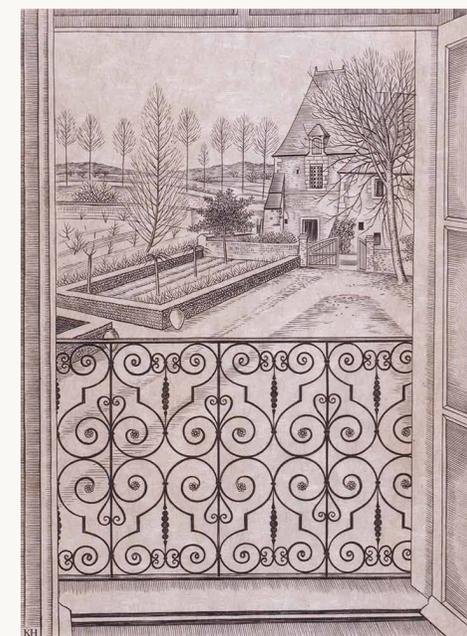
長谷川潔は横浜に生まれ、フランスに渡りました。《窓からの眺め(シャトー・ド・ヴェヌヴェルの窓)》は、第二次世界大戦中、ドイツ軍の侵攻に伴い、長谷川がパリからフランスの南へ疎開している間に制作しました。作者は窓の外に何を見えていたのでしょうか。

三橋兄弟治は横浜で教師をしていた頃《港》を描きました。税関の塔を望む横浜港の穏やかな様子には、一見すると戦争の気配は読み取れません。しかし、あまり質の良くない紙と、サインの上に記された「2600」の文字*からは、当時の空気を感じることができます。

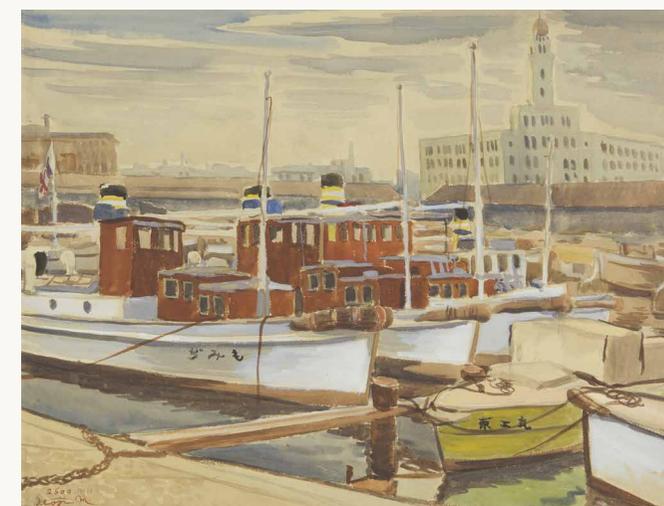
*神武天皇即位紀元(皇紀)2600年を示す。この年、戦時下における国民の団結と士気向上を目的に記念行事が実施された。



1



2



3

1 緑川廣太郎《ブランコと少年》1937年
油彩、キャンバス 60.8×61.0cm

2 長谷川潔《窓からの眺め(シャトー・ド・ヴェヌヴェルの窓)》
1941年 エングレーヴィング 30.4×22.2cm

3 三橋兄弟治《港》1940年 水彩、紙 57.3×75.0cm

1 作家がみつめた戦争

1941年、日本はアメリカ、イギリスとの戦争を開始しました。1944年にはアメリカ軍による日本本土への空襲が本格的に始まり、横浜も甚大な被害を受けました。

漫画家の八島一夫は、1945年5月29日の横浜大空襲を描いています。上空にたくさんの敵機が飛び交い、親子は防空壕へ駆け込もうとしています。子どもは飛行機を数えるのに夢中のように。戦争は、当たり前の日常を送る子どもたちにも容赦なく襲いかかりました。

4 八島一夫《横浜大空襲500機 [450まで数えられるってどうでもよいのよ早く逃げて]》1978年 マジック、水彩、紙 102.7×72.4cm

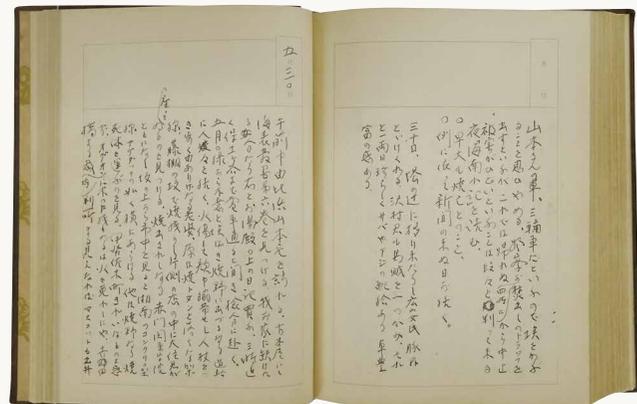


4

横浜を愛した作家 大佛次郎

おさらぎ
大佛次郎 (1897-1973年) は、「鞍馬天狗」、「赤穂浪士」、「パリ燃ゆ」、「天皇の世紀」など、時代小説、現代小説、ノンフィクション、童話、戯曲と、幅広いジャンルの執筆活動で知られる作家です。横浜に生まれ、大学卒業後は鎌倉に居を構えました。

大佛は戦時中から戦後にかけて日記を書き残しました。1945年5月30日の頁では、一面焼け野原の横浜を訪れた大佛が「初期防火も糞もなきなり」と怒りをあらわにしています。行きつけだったバー“ラ・マスコット”も空襲で焼失しました。



6



5

5 バー“ラ・マスコット”の様子、『明るい仲間』出版を祝す 1942(昭和17)年春(後列左端が大佛次郎)

6 大佛次郎「日記」1944年9月10日～1945年6月23日 いずれも大佛次郎記念館所蔵

4

2 描かれた戦後



7

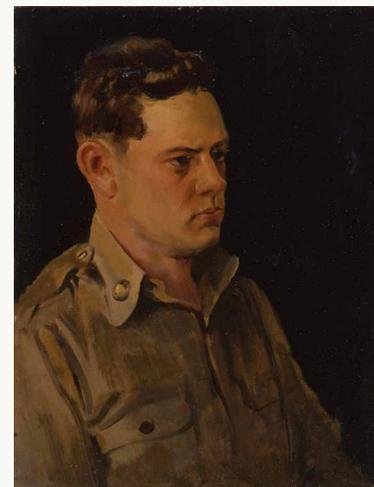
1945年9月、日本は降伏文書に調印し、戦争は終了しました。GHQ(連合国軍最高司令官総司令部)は占領政策に着手し、横浜の中心部や港湾施設も広範に接收しました。

横浜生まれの岩田栄之助は、山手の丘から見下ろした横浜港を描いています。手前のフランス領事館にはトリコロールの旗が揺れ、奥にはアメリカ領事館の星条旗も見えます。鶴見にアトリエを構えた木下孝則は、進駐軍の家族とも交流し肖像を描きました。生涯にわたり女性や植物の写実描写を追求した画家のまなざしは、軍人にも向けられました。宮本昌雄は横浜に生まれ、21歳から29歳まで従軍し、中国、ベトナムなどの戦地に赴きました。復員後、子安の工場に勤務しながら再び絵筆をとり、身近なモチーフを描くことを信条としました。画面の多くを乾いた地面が占める大胆な構図で、ひしめき合う工場や、煙突、ガスタンクを遠方に望んでいます。これらの作品からは、徐々に変化していく戦後復興期の横浜の様子が感じられます。

7 岩田栄之助《終戦後の横浜港》1947年 油彩、キャンバス 65.6×80.5cm

8 木下孝則《軍人の顔》1949年 油彩、キャンバス 64.5×49.7cm

9 宮本昌雄《工場 58》1958年 紙本着彩、パネル 117.1×170.6cm



8



9

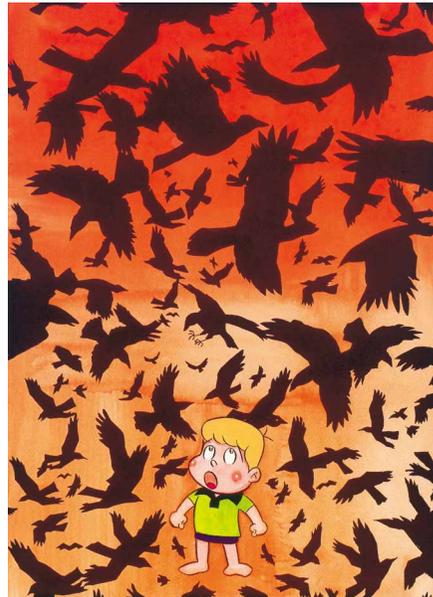
5

特別出品

書籍『私の八月十五日』シリーズより

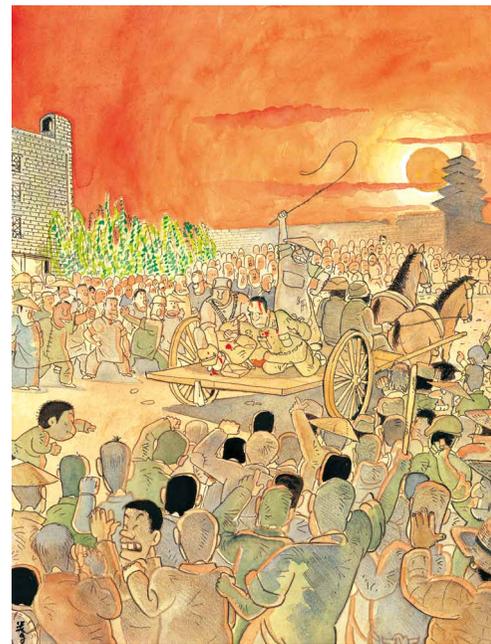
横浜市民ギャラリーは、1978年開催の「ヨコハマ漫画フェスティバル」*を機に制作された一コマ漫画の原画を収蔵しています。同展の出品作家であるちばてつや、森田拳次、赤塚不二夫らは幼少期を満州で過ごし、終戦後に命からがら帰還を果たしました。彼らが中心となり1995年に「中国引揚げ漫画家の会」、その後「八月十五日の会」を結成し、引揚げ体験を描いた『中国からの引揚げ—少年たちの記憶』(ミナトレナトス、2002年)や、終戦記念日の記憶を描いた書籍『昭和二十年の絵手紙 私の八月十五日』(同、2004年)を出版。日本と中国で展覧会も開催しました。その後、この活動は趣旨に賛同した出版社へと引き継がれ、各界の著名人も加わり、『私の八月十五日』シリーズ(今人舎、2015年復刊)が刊行されました。本展ではその中から当館の所蔵作家が描いた一コマ漫画をご紹介します。

*大通り公園が完成したことを記念して横浜市民ギャラリーで開催された展覧会。漫画家が横浜の名所や歴史などをテーマに描き下ろした大型の一コマ漫画が展示された。



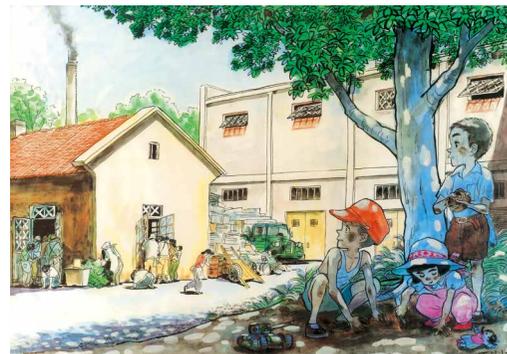
10

©赤塚不二夫



11

10 赤塚不二夫《赤い空とカラス》 11 森田拳次《記憶の奥の奉天》
12 ちばてつや《地獄の旅へ》 13 矢野徳《一ヶ月半前》



12

©ちばてつや



13

Interview

ちばてつやインタビュー

1939年東京生まれ、満州育ち。壮絶な逃避行を経て1946年に引揚げ。1956年高校生のときに作品が資本出版社に買い上げられ、漫画家デビュー。代表作に「ハリスの旋風」、「あしたのジョー」、「おれは鉄兵」、「のたり松太郎」など多数。2005年から文星芸術大学教授、2019年から2022年まで学長を務める。2012年から2018年まで日本漫画家協会理事長、2018年から会長を歴任。2024年文化勲章を受章。



横浜市民ギャラリー所蔵作品《暗闇に黒船》と満州からの引揚げ体験について

日本人にとって、黒船というのはとてもインパクトがあつてね。日本が植民地になることにすごく抵抗した。ここに出てくる私のキャラクターはみんな能天気でおおらかな人間なんですけど、当時日本人は真つ暗闇の中に黒船を見るような気持ちだったということを表現したかったんだと思います。

私は1歳の時に大陸(満州)に連れて行かれたから、ずっと海を知らなかったんです。あんなに大きな広い海を見たのも引揚げの時が初めてだし、大きな鉄の船が浮いていることがすごくショックだった。だから私にとって船はとてもインパクトがあるものなんです。



ちばてつや《暗闇に黒船》1978年

©ちばてつや

水彩、マジック、木、糸、鎖、紙 72.6×102.7cm

書籍『私の八月十五日』シリーズに掲載された《地獄の旅へ》

私の父親が、中国の東北部の奉天(現在の瀋陽)の印刷会社で働いていたんです。私はその社宅で暮らしていました。8月15日の正午に大事な放送があるからと社宅に回覧板が回りました。私は子どもだから全然知らずに行かなかったけれど、蝉がミンミンと鳴くとても暑い日で、天気がよかったです。大人たちが集められましたが、一瞬ものすごく静寂がありましたよ。みんな必死になってラジオを聞いていたんでしょう。しばらくしてからバタンと扉が開いて、大人たちがよろけるように出てきました。「日本が戦争に負けた。これから我々はどうしたらいいんだらう。日本はどうなっていくんだらう」ということが頭の中で渦巻いたんだらうと思います。青ざめていましたね。その日から日本人にとっては地獄みたいな時期が始まる、境目の時でした。それから逃亡生活が始まりました。父親と母親と、長男の私が6歳で、弟が3人、4歳と2歳と一番下は生まれて半年でした。中国の冬は零下20度から30度ぐらいになって寒いです。まばたきしないと目が凍っちゃうんです。体を寄せ合って、温め合いながら、あっちへ逃げこっちへ逃げしながら、次の年の7月20日ぐらいに中国の葫蘆島から船に乗って1週間ぐらいで博多港

に着きました。一家6人よく無事に生き残ったなと思います。でも子どもはあまり事情がよくわからないから、親がそばにいと何も怖くないんですよ。いつもおなかはすいているんだけど。親子でハイキングしているみたいだね。暴動もありましたが、中国には優しい人もたくさんいて、食べ物を恵んでくれたり、家を提供してくれたり、助けてくれました。

連載中の「ひねもすのたり日記」について

昔の漫画は子どものものでした。若い頃は子どもの気持ちかわかるから面白いものが描けますが、自分が大人になっていくと子どもの気持ちがうまく読み取れなくなったり、絵が枯れたり、お話がつまらなくなったりして、10年も漫画家をやったら大ベテランと言われて、仕事がなくなる感覚がありました。そのうち大人になって漫画を読む人が増え、大人の雑誌が出てきた。『ビッグコミック』という雑誌に依頼されたので、いろいろなことを日記風に描くようになりました。水木しげるさんが「わたしの日々」という作品で、90歳ぐらいの自分の日常を日記に描いていました。だから「ひねもすのたり日記」は水木さんへのオマージュで、続きを描かせてもらったような感じです。これまで漫画を描くことは結構苦しかったんですが、今すごく楽しく描いています。昔は7、8人で描いていましたが、今は奥ちゃん(奥さん)が楽しんで色を塗ってくれて、「セリフはこういう風に変えた方がいいんじゃないの?」とか注文も付けられて。「なるほどね」と思ったら変えたりして、一緒につくっています。

漫画を描き続けること

私のキャリアは少女漫画から始まりました。女の子の気持ちがよくわからなくて、悲しい話ばかりを描いてストレスがたまり病気をしたこともあるのですが、ある時ストーリーに息づまって…。それで思っきり男の子と戦う女の子を描いちゃったりしてね。編集の人に怒られましたけど、間に合わないからそのまま載せたら「こういうユカちゃん、大好き」とか読者の反応がすごくね。そこで吹っ切れましたよ。男の子も女の子もない、みんな同じ人間なんだから、悔しい時は悔しい、笑う時は大声を上げて空を見てワッハッハと笑うような、そういうキャラクターがいいやと思って。読者の反応でそのようなことに気づかされて、描いている途中で作品や作風が変わることもあるんですね。それで自分の世界がぐっと広がり、こうやって長いこと続けられたのかなと思います。

2025年10月21日 ちばてつやプロダクションにて
聞き手・編集：森末祈

- 2016年から『ビッグコミック』(小学館)に連載中のオールカラー作品
- 2014~2015年に『ビッグコミック』(小学館)で連載されたオールカラー作品
- 1959~1960年に『少女クラブ』(大日本雄辯會講談社[現・講談社])で連載された「ユカをよぶ海」の主人公



Interview 矢野徳インタビュー

1938年高知県生まれ。『週刊サンケイ』などへの投稿をきっかけに18歳で上京し、以降は、一コマ漫画やイラストに加え、小説の挿絵も多く手掛ける。1974年『元禄遊女伝』で第3回日本漫画家協会賞大賞、1984年第1回中日マンガ大賞グランプリ、2010年第1回日本出版美術家連盟大賞を受賞。現在は人類をテーマにタブローを制作中。



矢野徳《遊郭之図》1978年マジック、水彩、紙 72.4×102.8cm

像がバーッと出てくるんです。上京してからも困りましたよ。街を歩いているときなどに突然起こるんです。それで心理学の本を読んだり、いろいろな療法を試したり、精神科に相談したりしても治らない。やっとどり着いたのは森田療法という精神療法でした。その時に、「フラッシュバックが起きたら現れた人を恐れるのではなく、話を聞いてやりなさい」とヒントをもらいました。その人たちから逃げようとせず、みんな一緒に生きるんだ、そういう気持ちになり救われ、今では逆にその人たちに助けられますね。そういうふうに変換できたのは、45、6歳の頃でした。生まれる前の未生の者と、死後の人、自分と現生にいる人とが一緒に生きていくと感じるようになりました。戦争のことはまだに涙が出て、けれど、こういう過酷なことがなかったら、薄っぺらい人生を生きたんじゃないかなと思いますね。本当に生き死にのことを考えたり、苦労している人たちのことを考えたりするきっかけになっています。

ナンセンス漫画という表現

動物やら植物やらすべての命と生きている、そして死んでいく。中国で言えば老子のような思想、そういうのが漫画で言えばナンセンスなんです。ナンセンスとは、あるようでないようで、ある世界です。最近の量子力学の実験で、量子を観測すると、そこには不思議な状態が現れました。1でも0でもない。その代わりに、1と0の状態が重なり合い共存している。そういう状態が実験でわかったんです。それは仏教で言えば、無と有の中間にある空です。そういう感覚を持つ人がナンセンス漫画を描いている。「虚実皮膜」というリアルとフェイクの間のバーチャルに演劇や文芸や文化の面白さがあると考えた理論があります。ナンセンスの境地にはなかなか到達ができません。うまくいったときに「ああこれはナンセンスだ。だけど他の人に伝わるのかな」と思うことがありますね。

2025年12月16日 横浜市民ギャラリーにて
聞き手・編集：森 未祈

1 事実と虚構の微妙な接点に芸術の真実があるとする近松門左衛門の芸術論

ヨコハマ漫画フェスティバルと《遊郭之図》について

柳原良平さんとヒサクニヒコさんが、横浜の文化をみんなで描き分けるよう漫画家に振り分けました。それで僕はこういうのが得意だろうというわけで遊郭を描きました。ぶっつけ本番でしたから緊張しましたね。他の漫画家もみんな真剣にやっていて、なんだかおかしいんですね。普段はふざけてやっている人たちだから。遊女が生きる世界は「苦界」と言われます。その苦界の中でも一生懸命明るく健気に生きている姿が、庶民の生活と重なる部分が多いので、普段から遊女を題材にしています。でも漫画だからあまり悲惨なことは描かず、明るい部分を主にして描きました。

挿絵の仕事と時代状況

上京した頃(1950年代半ば)はいろいろな漫画雑誌が創刊されたので、四コマ漫画とか一コマ漫画とか挿絵とか、画風も名前も変えていろいろ描きました。1冊描けば大体3月くらいはご飯を食べられるギャラが出る。一生懸命描いてその本は出たけれど、出版社を訪ねたらもぬけの殻で、原稿料をもらえなかったという経験もしました。徐々に一コマ漫画が下火になり、ストーリー漫画は自分としては無理かなと思い、挿絵を描き始めました。挿絵の世界で一番大切なのは時代考証。挿絵家の先輩たちは、みんな博識なんです。そういうのに感化されて、古本屋で資料を集めて勉強しました。だけどあまりリアルに描くと絵にならない場合も多いので、嘘も描きます。昭和30年代に宣伝美術の人たちがイラストというかたちで挿絵を描き始めました。そうすると基礎を勉強せずムードで描くようになり、そういうのを「新しい」と喜ぶ人たちが出ました。古い挿絵家の人たちは「ちょっと違うな」と言う人が多かったですね。

書籍『私の八月十五日』シリーズに掲載された《一ヶ月半前》

終戦の放送の時に僕は逃げて釣りに行ってました。あんまりたくさん死体を見すぎちゃったから戦争は懲り懲りで。高知で空襲があった時、親父が天台宗の坊主だったので、死体を焼け跡の広場に集めたんです。たくさん人が死んで、近所の顔なじみの人も全部黒焦げでした。みんな苦しくてがいているんですよ。父親は読経して、僕と七つ上の兄で、一人ずつ水をあげる。死に水というだけあって、水を口に含んだ途端に死んじゃうんです。僕は七つだったから何もわからず怖くなかった。感覚がなかったんです。でも兄は「畜生、畜生」とずっと泣いていた。僕はそれを絵に描けなかった。もっとひどかったのが、県庁前の大きな新しい防空壕でした。僕の弟はそこに行って、その入口あたりで逃げたから助かった。防空壕の中は全滅だったんですよ。

やっとこの年になって、戦争の体験を話せるようになりました。戦後3年くらいして、木に登っていたら突然悲しいような、怒りのような変な感情が湧いてきて、フラッシュバックが起こりました。当時の映

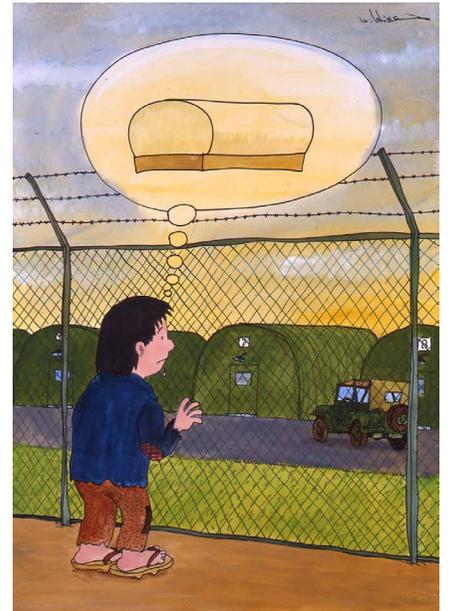
特別出品

ヒサクニヒコの横浜の記憶

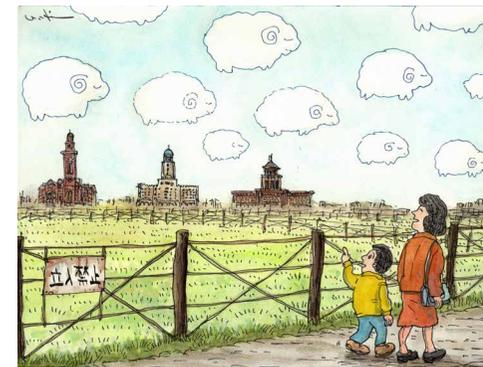
《占領下の伊勢佐木町[カマボコ兵舎の林立]》は、1978年開催の「ヨコハマ漫画フェスティバル」のためにヒサクニヒコが描いた作品です。トタンでできた米軍兵舎を眺めながらカマボコを連想し、おなかをすかせているのは幼少時の作者自身の姿でしょうか。ヒサは1951年、7歳のときに関西から横浜へ移り住みました。ここでは、『濱手帖13 横浜の記憶』(P to P合同会社、2024年)のために描き下ろされた原画をあわせて紹介します。戦後、まだ物資不足だった頃の子どもの遊び、次第に豊かになっていく街の様子、朝鮮戦争やベトナム戦争の影響など、ヒサが街と共に年齢を重ねながら体験した出来事がいきいきと表現されています。

14 ヒサクニヒコ《占領下の伊勢佐木町[カマボコ兵舎の林立]》1978年マジック、水彩、アクリル、紙 102.5×72.3cm

15-18 ヒサクニヒコ『濱手帖13 横浜の記憶』原画 2024年ペン、水彩、紙 P to P合同会社所蔵



14



15《関内牧場》



16《山下公園》



17《ベトナム戦争時の横浜中華街》



18《伊勢佐木町は映画の街》



19



22

3 写された戦後の横浜

1952年、サンフランシスコ平和条約が発効されると日本は独立を回復し、本格的な接收解除が始まりました。ここでは、1949年から1957年の移行期に写された写真を通して、当時の横浜を辿ります。

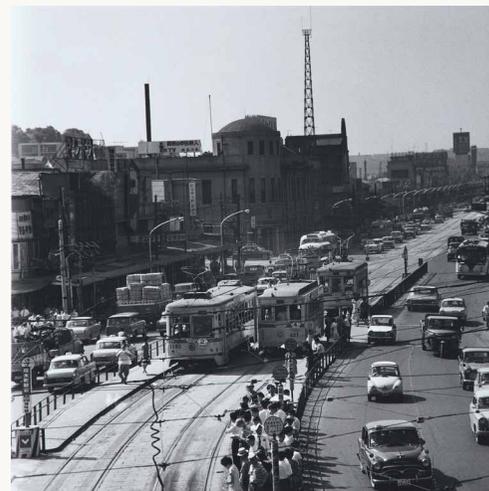
奥村泰宏は、故郷である横浜の移り変わりを写真に収めました。そのままざしは、市井の人々にも進駐軍にも等しく向けられ、そこに生きた一人ひとりの生を讃えています。常盤とよ子は、同時代を生きる女性や社会環境を撮影するなかで、赤線地帯*で働く女性たちとも信頼関係を築き、レンズを向けました。浜口タカシはフリーランスの報道カメラマンとして被爆地、大学闘争、公害など戦後社会の様々なテーマを撮り続ける傍ら、地元横浜の風景も捉えました。

これらの写真からは、戦後の物資不足が続く苦しい状況下でも、たくましく生きる人々の息遣いが聞こえてくるようです。

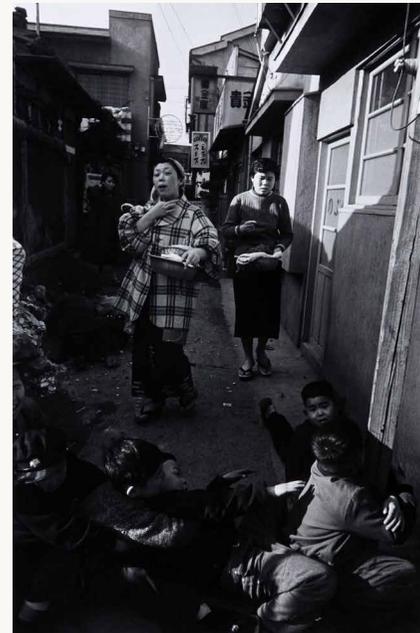
*売春を目的とする特殊飲食店の営業が許された地域。1957年に売春防止法が施行され、廃止された。



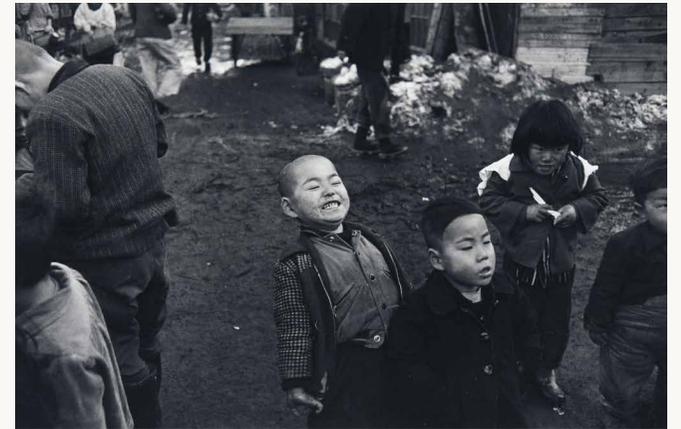
20



21



23



24

19 奥村泰宏《立入禁止・小港米軍キャンプ》1949年
ゼラチン・シルバー・プリント 28.6×43.8cm

20 奥村泰宏《クツみがき 伊勢佐木町》1953年
ゼラチン・シルバー・プリント 28.5×44.0cm

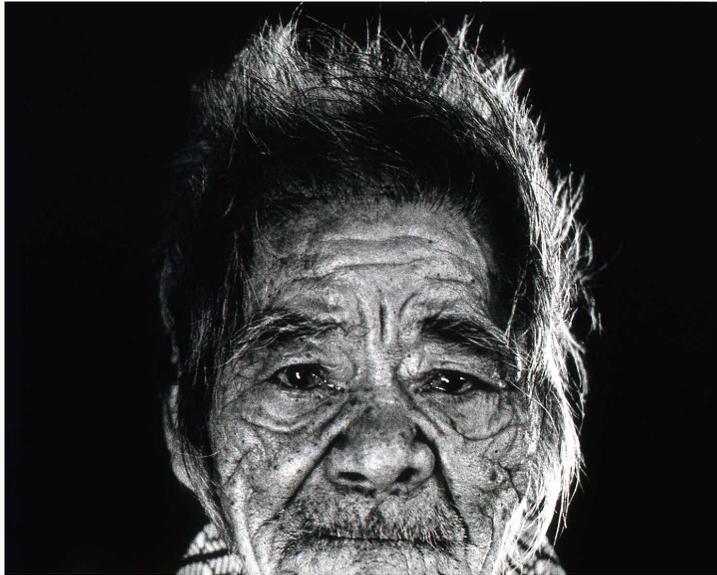
21 浜口タカシ《市電の詩》1957年
ゼラチン・シルバー・プリント 38.9×38.4cm

22 常盤とよ子《窓 日の出町裏》1955年
ゼラチン・シルバー・プリント 25.9×39.6cm

23 常盤とよ子《風呂帰り》1955年
ゼラチン・シルバー・プリント 39.9×25.9cm

24 奥村泰宏《日ノ出町》1952年
ゼラチン・シルバー・プリント 28.7×44.1cm

4 つづく戦後



25

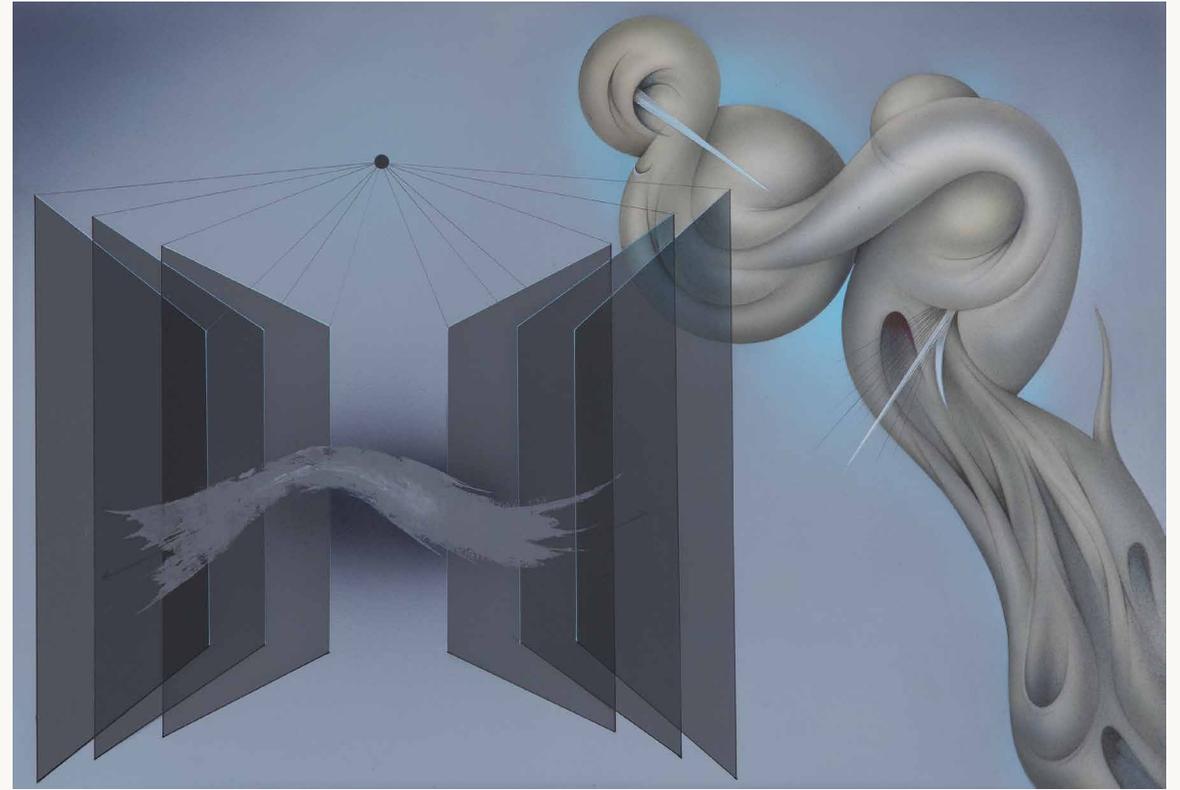


26



27

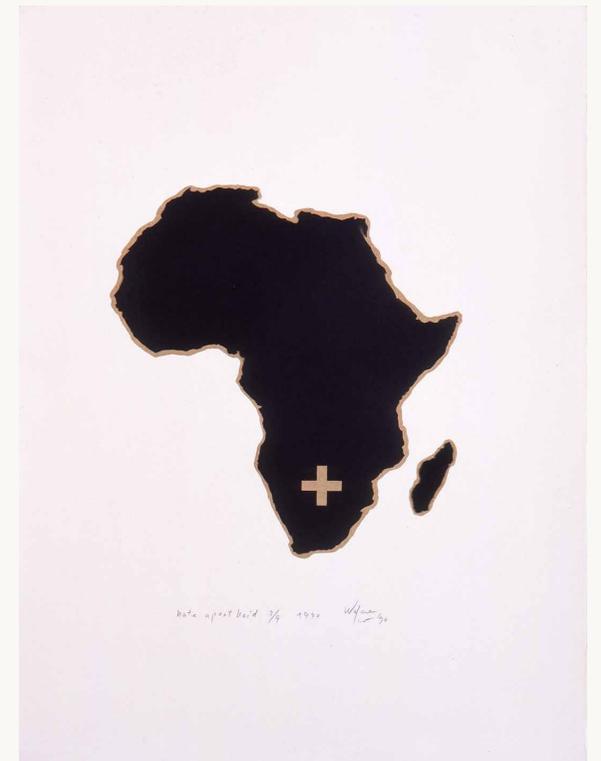
- 25 平良孝七《島の歴史を生きた老人(沖縄県多良間島)》1972年
ゼラチン・シルバー・プリント 44.6×54.9cm
- 26 山口啓介《O-Line》1992年
エッチング 82.8×123.8cm
- 27 山崎秀夫《米海軍通信隊(上瀬谷)》1979年
鉛筆、水彩、紙 30.8×40.3cm
- 28 池田龍雄《連作BRAHMANよりV章 点生》
1981年 油彩、アクリル、紙 53.7×76.7cm
- 29 若江漢宇《ヘイト・アパルトヘイト》1990年
ステンシル、フェルト、紙 72.7×52.6cm



28

1945年、日本にとっての戦争は終わりを迎えました。その傷跡が消えることはありません。

平良孝七は沖縄に生まれ、5歳で沖縄戦を体験した写真家です。老人の顔に深く刻まれた皺には、苦難を生きてきた人々の歴史が写しだされています。池田龍雄は15歳で特攻隊員となり生き延びた経験から、画家として社会に向き合い続けました。〈BRAHMAN〉シリーズでは、胎児のような形態を描き、永遠の真理を追い求めました。戦後生まれの山口啓介は、幼少期に影響を受けた漫画やアニメの背後に戦争の悲壮感を見出し、未経験の恐ろしいものが襲来するイメージを方舟の姿で表しています。山崎秀夫の水彩画には、2015年まで接収が続いた横浜・上瀬谷の風景が描かれています。この米軍施設跡地(旧上瀬谷通信施設)を利用して「2027年国際園芸博覧会」(愛称「GREEN×EXPO 2027」)が開催される予定です。それぞれの立場から社会に対峙する作家たちの作品は、戦争が遠い過去の出来事ではないことを私たちに教えてくれます。



29

作品リスト

● 大佛次郎記念館所蔵　▲ 書籍『私の八月十五日』シリーズより　■ P to P合同会社所蔵

記載のないものは全て横浜市民ギャラリー所蔵

プロローグ				
緑川 廣太郎	ブランコと少年	1937	油彩、キャンバス	60.8×61.0
長谷川 潔	窓からの眺め（シャトー・ド・ヴェヌヴェルの窓）	1941	エングレーヴィング	30.4×22.2
三橋 兄弟治	港	1940	水彩、紙	57.3×75.0

1.作家がみつめた戦争

八島 一夫	横浜大空襲500機 [450まで数えられるってどうでもよいのよ早く逃げて]	1978	マジック、水彩、紙	102.7×72.4
茨田 茂平	戦時中の金沢八景	1978	ペン、クレヨン、バステル、紙	72.4×102.7
林 忠彦	空の護り 松戸飛行場	1941	ゼラチン・シルバー・プリント	28.1×23.4
林 忠彦	水上機の格納 横浜	1941	ゼラチン・シルバー・プリント	31.1×20.3
林 忠彦	大佛次郎	1969	ゼラチン・シルバー・プリント	19.9×30.2

● 大佛 次郎	「日記」1944年9月10日～1945年6月23日	21.0×16.0 (開)
● 大佛 次郎	「自由日記」1946年3月4日～1947年5月7日	21.0×16.0 (開)
● 大佛 次郎	「帰郷」創作ノート	約20.0×28.0 (開)
● 大佛 次郎	原稿「序」『日本の作家 林忠彦写真集』（1971年、主婦と生活社）掲載	29.5×39.2
● 〈資料〉	大佛次郎『帰郷』初版本 1949（昭和24）年5月20日 苦楽社 口絵・図版・挿画：中西利雄 見返・扉：佐藤敬	18.3×12.8 (画：18.6×13.3)
● 〈資料〉	大佛次郎『明るい仲間』初版本 1942（昭和17）年1月8日 杉山書店 装幀：横山隆一	18.5×13.0 (画：19×13.5)
● 〈資料〉	バー“ラ・マスコット”の様子、『明るい仲間』出版を祝す 1942（昭和17）年春（3点）	各7.0×6.0
● 〈資料〉	バー“ラ・マスコット”から野尻清彦（大佛次郎）宛て「総御計算書」 1942（昭和17）年3月21日発行 前年12月からの四ヶ月分	18.2×12.7
● 〈資料〉	バー“ラ・マスコット”マスター市川六郎の名刺	5.3×9.0

2.描かれた戦後

木下 孝則	軍人の顔	1949	油彩、キャンバス	64.5×49.7
兵藤 和男	コンポートと珈琲ポット	1953頃	油彩、キャンバス	53.5×65.9
岩田 栄之助	終戦後の横浜港	1947	油彩、キャンバス	65.6×80.5
松島 一郎	横浜公園	1950頃	油彩、キャンバス	38.0×45.4
佐藤 努	山手風景	1949	油彩、キャンバス	73.0×90.5
島田 四郎	旧屏風ヶ浦風景 磯子の海	1959	油彩、キャンバス	53.5×72.5
宮本 昌雄	工場 58	1958	紙本着彩、パネル	117.1×170.6

特別出品：書籍『私の八月十五日』シリーズより

▲ 小島 功	虚ろな銀杏	複製パネル		
▲ 矢野 徳	一ヶ月半前	複製パネル		
▲ ちば てつや	地獄の旅へ	複製パネル		
▲ 高倉 健 絵：ちば てつや	日本が戦争に負けたらしいばい!	複製パネル		
▲ 多田 ヒロシ	遠い日	複製パネル		
▲ 森田 拳次	記憶の奥の奉天	複製パネル		
▲ 山田 洋次 絵：森田 拳次	満州育ちの私たち	複製パネル		
▲ 赤塚 不二夫	赤い空とカラス	複製パネル		
▲ 牧野 圭一	戦争より昆虫	複製パネル		
▲ やなせ たかし	無風地帯	複製パネル		
小林 治雄	米軍かまぼこ兵舎	1978	ペン、アクリル、水彩、紙	102.5×72.5
森田 拳次	横浜スタジアム・横須賀線	1978	マジック、水彩、紙	102.7×72.3
ちば てつや	暗闇に黒船	1978	水彩、マジック、木、糸、鎖、紙	72.6×102.7

赤塚 不二夫	国際都市横浜	1978	ペン、水彩、紙	72.4×102.6
矢野 徳	遊郭之囀	1978	マジック、水彩、紙	72.4×102.8
〈映像〉	作家インタビュー ちばてつや 矢野徳	2026		

特別出品：ヒサクニヒコの横浜の記憶

ヒサ クニヒコ	占領下の伊勢佐木町 [カマボコ兵舎の林立]	1978	マジック、水彩、アクリル、紙	102.5×72.3
■ ヒサ クニヒコ	『濱手帖13 横浜の記憶』原画（17点）	2024	ペン、水彩、紙	

3.写された戦後の横浜

奥村 泰宏	尾上町交差点	1949	ゼラチン・シルバー・プリント	33.9×33.9
奥村 泰宏	立入禁止・小港米軍キャンプ	1949	ゼラチン・シルバー・プリント	28.6×43.8
奥村 泰宏	タクシーに乗るGI	1950	ゼラチン・シルバー・プリント	28.6×43.9
奥村 泰宏	帰還兵とGI	1950	ゼラチン・シルバー・プリント	33.7×33.6
奥村 泰宏	ラバウルばあさん 横浜橋付近	1950	ゼラチン・シルバー・プリント	33.2×33.5
奥村 泰宏	吉田町	1951	ゼラチン・シルバー・プリント	28.6×44.1
奥村 泰宏	米軍兵舎	1952	ゼラチン・シルバー・プリント	31.0×44.3
奥村 泰宏	聖母愛児園 山手町	1952	ゼラチン・シルバー・プリント	34.6×34.6
奥村 泰宏	日ノ出町	1952	ゼラチン・シルバー・プリント	28.7×44.1
奥村 泰宏	クツみがき 伊勢佐木町	1953	ゼラチン・シルバー・プリント	28.5×44.0
奥村 泰宏	米軍専用バス停 日本大通り	1954	ゼラチン・シルバー・プリント	29.3×44.8
奥村 泰宏	撤去された米軍兵舎跡	1955-56頃	ゼラチン・シルバー・プリント	29.3×44.7
常盤 とよ子	真金町遊郭初店	1954	ゼラチン・シルバー・プリント	26.6×40.5
常盤 とよ子	赤線の女―横浜	1955	ゼラチン・シルバー・プリント	25.4×39.2
常盤 とよ子	窓 日の出町裏	1955	ゼラチン・シルバー・プリント	25.9×39.6
常盤 とよ子	赤線地帯―横浜	1955	ゼラチン・シルバー・プリント	25.4×39.1
常盤 とよ子	風呂帰り	1955	ゼラチン・シルバー・プリント	39.9×25.9
五十嵐 英壽	貯木場	1956	ゼラチン・シルバー・プリント	31.2×47.1
五十嵐 英壽	氷川丸再就航	1953	ゼラチン・シルバー・プリント	31.2×46.9
浜口 タカシ	市電の詩	1957	ゼラチン・シルバー・プリント	38.9×38.4
〈映像〉	作家インタビュー（編集版） 常盤とよ子（2016年撮影） 浜口タカシ（2017年撮影） 五十嵐英壽（2014年撮影） ヒサクニヒコ（2017年撮影） 山口啓介（2020年撮影）			

4.つづく戦後

平良 孝七	島の歴史を生きた老人（沖縄県多良間島）	1972	ゼラチン・シルバー・プリント	44.6×54.9
英 伸三	北富士の基地返還闘争―山梨県南都留郡梨ヶ原	1970	ゼラチン・シルバー・プリント	35.9×53.9
浜口 タカシ	最後の移民船	1973	ゼラチン・シルバー・プリント	36.7×49.9
浜口 タカシ	「俺たちに仕事をくれ」　メーデー行進	1974	ゼラチン・シルバー・プリント	50.1×36.7
池田 龍雄	連作BRAHMANより V章 点生	1981	油彩、アクリル、紙	53.7×76.7
池田 龍雄	連作BRAHMANより VI章 気跡	1982	シルクスクリーン、手彩色	51.0×75.0
池田 龍雄	連作BRAHMANより VII章 気跡	1982	シルクスクリーン、手彩色	51.0×75.0
田代 利夫	アメリカの形 70-2	1970	油彩、キャンバス	162.3×130.7
緑川 廣太郎	捕虜の丘	1965	油彩、キャンバス	145.0×98.0
若江 漢字	ヘイト・アパルトヘイト	1990	ステンシル、フェルト、紙	72.7×52.6
山口 啓介	O-Line	1992	エッチング	82.8×123.8
鈴木 健夫	日米盆踊り	1988	ゼラチン・シルバー・プリント	36.6×56.0
仁平 廣	米軍通信隊のある町	1988	ゼラチン・シルバー・プリント	44.8×55.7
仁平 廣	米軍通信隊のある町	1988	ゼラチン・シルバー・プリント	44.7×55.2
仁平 廣	米軍通信隊のある町	1988	ゼラチン・シルバー・プリント	44.8×55.3
山崎 秀夫	米海軍通信隊（上瀬谷）	1979	鉛筆、水彩、紙	30.8×40.3

[謝辞]

この展覧会を開催するにあたり、多大なご協力をいただきました次の個人、関係機関に深く感謝申し上げます。(敬称略)

ちばてつや 五大路子
ヒサクニヒコ 後藤泰観
矢野 徳

池田 哲 石田哲朗 一般社団法人横浜夢座
伊藤美弓 香月千秋 株式会社小学館 ビッグコミック編集部
岩田 梢 川口麻里絵 株式会社フジオ・プロダクション
上村佳世子 千葉洋嗣 帰還者たちの記憶ミュージアム (平和祈念展示資料館)
大河原順子 長崎裕起子 ギャラリー58
貴山八重 西村 健 東京都写真美術館
栗林阿裕子 由愛典子 名護博物館
小山文大 NPO 法人横浜シティガイド協会
永峯千尋 浜口タカシ写真事務所
長谷川比奈 P to P 合同会社
松島宏人 有限会社ちばてつやプロダクション
宮本太郎 横浜開港資料館
山口啓介
若江漢字

[展覧会情報]

横浜市民ギャラリーコレクション展 2026 戦後をあゆむ
YCAG Collection Exhibition 2026 The Postwar Path

横浜市民ギャラリー 展示室 1、B1
2026年2月20日(金)～3月8日(日)
10:00～18:00(入場は17:30まで) 入場無料 会期中無休

主催 横浜市民ギャラリー
(公益財団法人横浜市芸術文化振興財団/西田装美株式会社 共同事業体)
協力 8・15朗読・収録プロジェクト実行委員会/株式会社今人舎、
大佛次郎記念館



[関連イベント]

レクチャー
「漫画で記憶を描きとめる～ヒサクニヒコの横浜の記憶～」
2月21日(土) 14:00～15:30
講師：ヒサクニヒコ(ヒトコマ漫画家、イラストレーター)

担当学芸員によるギャラリートーク
2月23日(月・祝) 11:00～11:30
担当：森 未祈(横浜市民ギャラリー主任学芸員)

朗読とお話「戦後を生きた女性たち」
2月28日(土) 14:00～14:40
出演：五大路子(俳優、「横浜夢座」座長)、後藤泰観(Vn.)

ハマキッズ・アートクラブ
「横浜市民ギャラリーまるごと探検ツアー」
3月1日(日) 10:30～11:40
講師：伊藤ちひろ(横浜市民ギャラリー学芸員)
対象：小学3～6年生

おしゃべりの日@コレクション展
3月1日(日) 10:30～12:30、14:30～16:30、
8日(日) 14:00～16:00
鑑賞サポーター：東亨朱美、天野悦子、大坂恵一、加藤誠彦、
小泉成史、込山由香理、下村典子、中江 実、中村久子、服部えり、
三橋泰子、吉田和子、吉野千鶴子、和田正幸

ガイドツアー & ミニ講座
「戦後の横浜風景 ～絵&写真で辿る伊勢佐木・日ノ出町・野毛～」
3月7日(土) 9:30～12:00
主催：NPO 法人横浜シティガイド協会
共催：横浜市民ギャラリー

学芸担当 森 未祈、齋藤里紗、伊藤ちひろ
執筆 森 未祈
会場テキスト執筆協力 大佛次郎記念館 安川篤子、金城瑠ひ
デザイン 重実生哉
印刷 株式会社野毛印刷社
インタビュー映像制作 播本和宜

[表紙]
上段左から 常盤とよ子《真金町遊郭初店》1954年 ゼラチン・シルバー・プリント 26.6×40.5cm / ヒサクニヒコ『濱手帖 13 横浜の記憶』(P to P 合同会社、2024年)より
下段左から ちばてつや《地獄の旅へ》(書籍『私の八月十五日』シリーズより) ©ちばてつや / 山崎秀夫《米海軍通信隊(上瀬谷)》1979年 鉛筆、水彩、紙 30.8×40.3cm

編集・発行 横浜市民ギャラリー(公益財団法人横浜市芸術文化振興財団/西田装美株式会社 共同事業体)
〒220-0031 横浜市西区宮崎町26番地1
TEL 045-315-2828 FAX 045-315-3033 <https://ycag.yafjp.org/>

